

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 28 日現在

機関番号：14501
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520139
 研究課題名（和文） チェコ・バロック研究

研究課題名（英文） Czech Baroque

研究代表者

石川 達夫 (ISHIKAWA TATSUO)
 神戸大学・大学院国際文化学研究所・教授
 研究者番号：00212845

研究成果の概要（和文）：本格的な再評価がなされるようになってきたチェコ・バロックについて、重要な文献資料をほぼすべて収集し、実地調査によって数百枚に及ぶ貴重な画像を撮影することができた。プラハに新たに設置されたチェコ国立美術館バロック分館、モラヴィア地方の古都オロモウツの独自で豊かなバロックの文化遺産も調査できた。研究を通してチェコ・バロックを、1. 迷宮、2. 楕円 3. 歪みという、3つの表象的モチーフから捉えて分析する方法を考え出し、それによってチェコ・バロックの全体像に迫る上で有効な視点を確立することができた。この研究をまとめて研究書を刊行する予定である。

研究成果の概要（英文）：The Czech Baroque is beginning to be evaluated seriously. I succeeded to collect almost all the important literature about it and to take hundreds of photos by the field work investigation. I also investigated the Baroque annex of the Czech National Gallery in Prague and the original and rich Baroque heritage of the Moravian old town Olomouc. I devised the method of seizing the Czech Baroque by three representational motifs: 1. Labyrinth, 2. Ellipse, 3. Distortion. And by this method I established a valid point of view for understanding of the whole figure of the Czech Baroque. I'm planning to publish a book in which I will round off my researches.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：表象文化論、チェコ、バロック、対抗宗教改革

1. 研究開始当初の背景

(1) かつてヨーロッパにおいて悪趣味なものとして軽蔑されていたバロック芸術が、19世紀末以降スイスの芸術史家ヴェルフリンなどによって再評価されてきたことは知られている通りである。日本でもかつてバロ

ックに関する著作は単発的に断片的なものが出されただけであったが、近年、美術史家の高階秀爾氏（『バロックの光と闇』2001年）や宮下規久朗氏（『バロック美術』2003年、『イタリア・バロック』2006年）らの本格的な研究によってバロック芸術に新たな光

が当てられてきた。しかしながら、フランスの批評家フェルナンデスが「これほど統一された様式、これほど調和にみちたアンサンブルは、ローマでも、ミュンヘンでもウィーンでも見出せない。家々の正面や教会や宮殿だけではなく、空間そのもの、街路の配置そのものがバロックなのだ」と感嘆したほどのバロック文化の宝庫であるプラハとチェコのバロックについては、日本では研究がいまだにほとんど全く手つかずの状態であり、チェコ本国においてさえようやく本格的な研究が端緒についたところである。

(2) 日本においてチェコ・バロックがほとんど研究されていないのには、言葉(チェコ語)の問題、チェコが小国であること、チェコが長らく社会主義圏であったことが大きく影響していると思われるが、チェコ本国において本格的な研究が遅れたのには、チェコの複雑な歴史が影響している。すなわち、15世紀初頭のフス運動以降プロテスタントが圧倒的多数派になったチェコは、プラハから起こった30年戦争初期にプロテスタント勢力が致命的な敗北を喫したために厳しい対抗宗教改革にさらされて、ほとんど完全に再カトリック化されると同時に、チェコ語・チェコ文化が没落してドイツ語・ドイツ文化が支配的になった。その後、17世紀後半から始まった「チェコ民族再生運動」が成功することによってチェコ語・チェコ文化は再生されたが、その反作用として、先行するバロック時代は対抗宗教改革とドイツ化によってチェコ語・チェコ文化が没落させられた「暗黒時代」として、一面的に否定的な評価がなされるようになったのである。

(3) しかしながら、ウィーン大学で1890年代以降バロック芸術の見直しを始めていた芸術史家リーグルのチェコ人の弟子でウィーン大学教授となったドヴォジャークと、その友人でプラハ大学教授となったシュスタなどが、20世紀になってからチェコ・バロックの再評価に乗り出した。さらに1930年代になると、カトリック系の文学史家などが、チェコ・バロックの再評価を始めた。だが、このような再評価には対抗宗教改革と再カトリック化の「暗黒時代」を復権しようとするカトリック側のイデオロギー的意図が込められていたし、またそのような研究すらも1939年以降のナチス・ドイツによる支配と、第二次大戦後の共産党による支配のために抑圧されることになり、チェコ・バロックの自由な研究は十分に発展しなかった。そして、1989年の共産党政権崩壊後ようやくチェコ・バロックの本格的な研究が再開され、ヴォピェンカの『チェコ・バロックの驚くべき開花』(1998年)などの研究が出されたが、

この本も自然科学者が主にバロック時代の思想的背景を探ったものであり、チェコ・バロックの全体像はいまだ十分に明らかにされてはいない。

(4) 研究代表者は、長年にわたってチェコ精神史・文化史の研究を続けてきて、『マサリクとチェコの精神』(成文社、1995年、サントリー学芸賞受賞)、『黄金のプラハ』(平凡社、2000年)、『プラハ歴史散策』(講談社、2004年)などの著書を4～5年ごとに世に出して来た。そして、従来の研究を発展させる形で研究助成金を取得して、2005年から2008年まで「チェコ民族再生運動」の本格的な研究を行い、2008年5月にその研究成果を研究報告書にまとめ、それに加筆して『チェコ民族再生運動——多様性の擁護、あるいは小民族の存在論』(岩波書店、2010年)という大部の著書として出版した。この研究の過程で、「チェコ民族再生運動」以降、チェコ語・チェコ文化を没落させた「暗黒時代」として一面的に否定的に捉えられていたチェコのバロック時代には、建築や彫刻といった顕著なバロックの造形芸術的遺産以外にも、チェコ語で書かれた独特なバロックの文学もある程度存在し、またレベルの高いバロックの演劇と音楽もチェコに存在したことが分かってきた。そこで研究代表者は、「チェコ民族再生運動」の全体像を明らかにした現在、いまだに十分に明らかにされていないチェコ・バロックの本格的な研究に取り組むことにした。

2. 研究の目的

(1) チェコ・バロック文学とその周辺については、チェコ出身の研究者ソウチコヴァー(Součková)が1980年に英語で出した研究書 *Baroque in Bohemia* (The University of Michigan Press, 1980)があり、これは先駆的で優れた研究なのだが、記述に誤りも散見し、必ずしも十分な研究とは言えない。そもそも対抗宗教改革を推し進めるためのカトリック側のイメージ戦略として利用されたバロック芸術は多分に総合芸術という性格を持っていたが、チェコ・バロックを再評価するためには、その見事な遺産と見なされている造形芸術だけでなく、文学・演劇・音楽も含めて、厳しい対抗宗教改革とドイツ化が推進された複雑なチェコの時代状況において、その全体像を捉える必要があるだろう。研究代表者はすでに『マサリクとチェコの精神』においてチェコの宗教改革と「チェコ民族再生運動」についてかなり明らかにし、さらに先述のように『チェコ民族再生運動——多様性の擁護、あるいは小民族の存在論』において「チェコ民族再生運動」の全体像を詳細に明らかにした。だが、宗教改革と「チェコ民族

再生運動」との間のバロック時代については、『黄金のプラハ』と『プラハ歴史散策』において建築と彫刻をめぐってある程度論じたものの、いまだ十分に捉えられていない。これにはもちろん、先述のようにチェコ本国ですらまだ十分なチェコ・バロック研究がなされていなかったという事情も影響している。

(2) そこで研究代表者は、チェコ本国で再開された本格的なチェコ・バロック研究とその他の国における研究を踏まえながら、チェコ・バロックの全体像に迫ることとした。その際特に、カトリックの中心地であったローマ（とイタリア）のバロックと、かつてプロテスタントの中心地の一つでありながら再カトリック化されたプラハ（とチェコ）のバロックとの相違についても考究して、チェコ・バロック固有の特徴を明らかにすることを目指した。実はこの相違について研究代表者はすでに『黄金のプラハ』において、（イタリアの彫刻家）ベルニーニの「聖テレサの法悦」と（チェコの彫刻家）ブラウンの「放蕩息子の帰還」とを対比するなどしながらある程度論じ、恍惚の中に没入して無時間性に到達した勝者のバロックと、歴史性を色濃く帯び、記憶と責任の重みに耐え、運命を受忍する敗者のバロックとの相違として解釈したが、このような解釈をさらに深めて、先行するプロテスタントの伝統を抑圧しながらもそれと複雑に融合したチェコ・バロックの特徴を闡明することにした。そして、最終的には研究成果を本にまとめて、バロック文化の宝庫であるにもかかわらず日本ではまだあまり知られていないチェコ・バロックについての研究書を世に出し、バロック研究の欠落部分を補うと同時に、バロック文化の多様性について新たな知見をもたらすことを研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、プロテスタントの中心地の一つでありながら厳しい対抗宗教改革とドイツ化にさらされたプラハとチェコのバロックの全体像をその時代背景の中で捉え、プロテスタントの伝統を抑圧しながらもそれと複雑に融合したチェコ・バロックの特徴を闡明し、研究成果を本にまとめて世に出すことを目指した。そのために、まだ十分とは言えない先行研究を踏まえながら、チェコ・バロックの文学・造形芸術・演劇・音楽、さらに伝説・表象文化に関する資料を豊富に収集すると同時に、現地調査を行いながら研究を進めた。

(2) チェコ・バロック研究は、日本にはほとんど全く存在しないチェコ・バロックに関する資料の収集から始めた。文献資料について

は、インターネットをフルに利用して検索し、読むに値すると思われる資料をリストアップして、データベースに入力した。その上で、チェコのインターネット書店で新刊書を購入し、チェコに出張した際に書店と古書店を回って新刊書と古書を購入した。また、どうしても購入できなかったものについては、チェコ国立図書館の国際相互貸借制度を利用してチェコから文献を取り寄せた。

また、研究期間中3回チェコに出張し、チェコ国立図書館と古文書館で貴重な資料を収集した。

(3) 3回にわたる現地調査では、プラハはもちろんのこと、プラハ近郊のバロック様式のトロヤ城、「オロモウツ・バロック」と呼ばれる独自の豊かな遺産をもつオロモウツを調査し、チェコ・バロックの芸術遺産（建築・彫刻・絵画など）を高性能のデジタルカメラで数百枚のデジタル写真に撮った。

(4) 文献学的研究方法においては、近年チェコでチェコ・バロックの遺産が再評価されると共に続けざまに出版された何冊かの新しい研究書に目を通し、最新の研究動向を把握した。それに続いて、美術、建築、文学、音楽に関する既刊の文献を読み始めたが、残念ながら時間不足で十分に読み切れなかった。

4. 研究成果

(1) 文献資料に関しては、プラハの国立図書館、古書店、書店等で調べた結果、論文も含めるとチェコ・バロック関係の文献が意外にも百数十点もあることが分かり、日本にいて手に入らないものについてはチェコに出張した際に収集および読解に努めた。その結果、チェコ・バロックに関する重要な文献はほぼすべて入手することに成功し、日本における貴重なチェコ・バロック文献コレクションを構築することができた。

(2) 図像資料に関しては、チェコに出張して現地調査を行うことにより、かなりの遺産を調査することに成功し、それらを高性能のデジタルカメラで数百枚のデジタル写真に撮ることができた。これらの写真は、将来チェコ・バロック研究を書物として出版する際に資料として付けることができる貴重な画像である。また、実地調査を通じて、東欧革命以後、チェコでもバロック芸術の遺産への関心が非常に高まってきて、チェコ国立美術館が専門のバロック分館を設置したことが分かったことは、大きな収穫であった。このバロック分館には、非常に多くのチェコ・バロック美術が集中的に納められていて、ここでもバロックの芸術遺産の充実した調査と撮影を行うことができた。

また、3回目の調査ではモラヴィア地方の古都オロモウツを調査したが、ここには「オロモウツ・バロック」と呼ばれる、目を見張るような独自で豊かな文化遺産があることを、非常に驚きと共に発見した。ちょうど現在、当地の博物館がオロモウツ・バロックに関する数巻の大部の書籍を刊行中であることを知ったのも収穫であった（この本は書籍市場に通常のルートでは流通していないので、この本は一般には知られていない）。このように、実地調査に関しては、かなりの成果を収めることができた。

(3) 以上のように、文献資料については、特に新刊と古書で貴重なチェコ・バロック関係文献を多数収集することに成功し、主なものはほぼすべて収集することができた。また、図像資料についても、自らデジタルカメラで撮影した画像と入手した美術書によって、かなり収集することに成功した。

ただ、残念ながら2年間管理職についていたため、時間不足から、それらを十分に使って自らの研究を深め、充実した研究書ないし論文にまとめあげるには至らなかった。それでも、チェコ・バロックを、1. 迷宮、2. 楕円 3. 歪みという、3つの表象的モチーフから捉えて分析する方法を考え出し、それによってチェコ・バロックの全体像に迫る上でかなり有効な視点を確立することができた。チェコ・バロックに関する自分の研究書も、これら3つの表象的モチーフをそれぞれ1つの部に当てる3部構成とし、第1部「迷宮」については、ある程度原稿を書き進めた。科研は今年度で終了してしまうが、今年度一杯で管理職から解放されるので、是非研究書を仕上げたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件) (総計5件)

- ① 石川達夫、書き換えられる地図としての中欧、思想、査読無、1056号、2012、3-8
- ② (翻訳) クロウトヴォル (石川達夫訳)、中欧の困難さ——アネクドートと歴史、思想、査読無、1056号、2012、124-171
- ③ 石川達夫、千年の古都プラハの新芸術、季刊プローチ、査読無、2011、4-5

[図書] (計1件)

- ① 石川達夫、岩波書店、チェコ民族再生運動——多様性の擁護、あるいは小民族の存在論、2010、520

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石川 達夫 (ISHIKAWA TATSUO)

神戸大学・大学院国際文化学研究所・教授

研究者番号：00212845